愛知学芸大学附属
春日井小学校へ転校

戦争が終わって、地元の篠木小学校から新しい小学校に転校することになった。その小学校とは、1946年の春、戦争で校舎が焼けて春日井に引っ越してきた愛知学芸大学附属春日井小学校である。校舎もなく、教科書もない学校生活は、戦時に軍事用に使われていた建物を、教室に改修する作業から始まった。先生と、父兄と生徒の協力により、全てが自然の中での自由な発想で軍需工場用の建物が学校に変身していく。

与えられた教材が全くなかったので、教室を作ることがそのまま学習になっていた当時、夏の授業は校内に残されていた鉄道の引き込み線のプラットホームの上で、生徒は裸で受けていた。始めから、生徒の自由研究が教育課題として採用されていたし、先生がガリ版刷りした紙が毎日少しずつ配られて、生徒はそれを大切にとじて、教科書になっていった。すべてが宝物として、次々と出来上がっていった。

戦後初の天皇陛下の行幸が昭和26年の愛知国民体育大会に行われたが、帰路、陛下は国鉄中央線を利用された。生徒は、小学校横の線路沿いの田んぼの土の上に正座して、頭を下げて通過する列車を見送った。その田んぼは、生徒が米作りを体験する学習の場であった。

それ以来、天皇陛下は幼い小学生の心に自然に入り込んできていた。

自宅の庭

戦時は、庭はその下には二列の防空壕があり、生命を外敵から護っていたが、戦後は元の土の庭に戻って農園となって、今度は生命を支える食料供給の場となって存在し、そこからは、打ち出の小槌のように必要なものが現れていた。

季節に合わせて取れるもののみが食卓に並べられ、それを自然の恵みとして、感謝して味わっていた。トマト、きゅうり、なす、えんどう、カボチャを栽培し、それらは自前で実を結び、季節の味わいをたのしませてくれた。

ふきは塀の横に、自然に生えていたし、ブドウも秋には実をなした。

秋には、渋柿が鈴生りに実り、それらは干し柿になって軒に吊るされ、冬の寒さに甘みを増し、残りは、もみ殻の中で熟して食される時を待っていた。庭に掘られた土の穴には、ジャガイモ、サトイモ、サツマイモが保存されており、ゴボウや、ネギも時折同居していた。

菌を打ち込んだ椎の木の端が庭に立てられて、そこに生えるシイタケを取り入れる度に、自然の不思議さを見せられていた。

鶏小屋には、数羽の鶏たちが飼われて、それらの夜明けを告げる声は済んだ空気を震わせ、生気を与え、卵を取りに行く楽しみの中で、毎朝の貴重な栄養源は供給された。

新鮮なもの、保存されたものも、季節に応じて供給されて、一年を通して味覚を充実させる庭は正に宝の山となっていた。

ドイツの環境都市フライブルグで、環境ホテルがカレンダーで示す、季節に食べるべき食材に応じての生活そのものと、1996年の都市訪問で知ることになった。

庭のほかの場所には、ユキノシタ、ドクダミ、センブリが自生し、病の時の、救い主として存在し、それぞれ花を結び、季節の移り変わりを味わっていた。

（石黒隆敏）